

説教余滴、「光陰矢の如し」2019年1月6日

東北の牧師から年賀状を戴きました。

《最近、物事・出来事の過ぎ行く速さを感じています。この時期は、自分をしっかり持っていないと、と、短く浅い経験ながら思います。》とありました。先生は、一時牧師を辞めようかと悩みました。二年間の休職を経て再起を決意。神学校の推薦によって雪深い地の、幼稚園のある教会へ赴任されました。初めての園長兼務です。

今年七年目になります。一生懸命仕事をこなしておられるご様子です。

小規模であっても、教会付属幼稚園があると、精神的には休まる時がありません。彼は、大変まじめ、堅物、それでいて健康のためジムに通う、という一面を持っています。これは大変よいこと、と感じます。友人が出来るでしょう。園児募集に役立つかもしれせん。

子どもたちと遊ぶためには腕力も必要です。牧師・園長職をやりきるためには、健康な体力が求められます。きっと良い成果を挙げられることでしょう。

「過ぎ行く速さ」、とあり、そこで思い出したのは、「光陰矢の如し」、という格言です。

行きてまた帰らず、と続いたような記憶があります。月日の経つのはあつという間で二度と戻ってこないから、無為に送るべきではないという戒めを含みます。「光」は日、「陰」は月の意味で、「光陰」は月日や時間を表します。

確かに、齢を重ねるにつれて時間の流れは早くなり、1年なんてあつという間に過ぎてしまいます。「光陰矢のごとし」という言葉は、それを的確に表した言葉と言えるでしょう。

この言葉は、八世紀中頃、中国で李益という人物が書いた「光陰如箭(こういんじょせん)」という詩の一節から来ているそうです。「箭」というのは、弓から放たれた矢の事で、「光陰如箭」を日本語訳したのが「光陰矢のごとし」という言葉になります。2018年になったと思ったばかりなのに、早くも2019年です。